

## 鎌倉僧医の医の倫理観 (2)

—三種の『看病用心鈔』の写本について—

関 根 透

はじめに

先人の叡智である名著は、現在の複雑な社会に生きる私たちに、多くの示唆と感動を与えてくれる。特に、先人の叡智は人生の生き方を真摯に考える「倫理学」においては、時代を超えた礎を提供してくれる。鎌倉時代に著わされた『看病用心鈔』においても、時代を超越して現代の倫理に大きな意義を提供してくれるものである。そこで、私は現存する『看病用心鈔』の写本を全て調査する機会に恵まれたので、それらを対比し易いように、各条目ごとに三段にして、その全文を示してみた。

なお、この拙論は、高崎直道先生を研究代表者とする平成八・九年度科学研究費（基盤研究(A)(2)）の『中世都市における仏教文化の総合的研究（特に鎌倉を中心として）』（〇八四〇一〇〇二）の調査結果によるものである。

一

さて、この現存する三種の『看病用心鈔』の写本の年代、書写した人物、三種の関係、内容、ターミナル・ケアや延命に関する現代医療との比較、良忠上人の考え方などについては、次回に詳しく説明し、医の倫理における現代的

意義についても、そこで述べたいと思っている。

まず、この拙論の構成として。上段の写本は滋賀県安土・浄厳院所蔵の『看病用心抄』である。平成九年一月十一日、鎌倉の大本山光明寺の執事長・宮澤善弘氏にお会いし、同じ宗派の安土・浄厳院を紹介してもらった。平成九年一月二十四日に浄厳院を訪れ、ご住職の勝山定信氏のご好意により『看病用心抄』の全文を写真に撮らせていただいたものである。

次に、中段の写本は京都・常楽台に所蔵されていると言われる写本である。平成九年九月二十八日に龍谷大学大宮図書館に常楽台所蔵の写真があり、その写真を判読しつつ示した『看病用心抄』である。戦後間もなく、写真に撮ったものらしく、不鮮明で、コピーでは判読できない文字もあった。なお、常楽台所蔵の『看病用心抄』写本については現存しているかどうか調査中であり、龍谷大学図書館から常楽台を紹介していただいた。

下段の第三の写本は、金沢文庫所蔵の『看病用心抄』である。この写本は、戦前まで大崎・専修寺に所蔵されていたものを、昭和二年に石井教道氏が筆写して大正大学図書館に寄贈された。しかし、専修寺の写本は大戦の折に灰燼に帰し、大正大学の写本も紛失してしまった。幸いなことに、昭和二十五年に金沢文庫長の熊原政男氏が大正大学所蔵の写本を筆写していた。この下段の金沢文庫所蔵の『看病用心抄』は熊原氏の筆写したものである。なお、平成九年三月十五日に代表者の高崎直道先生以下分担者や仏教文化研究所員らと金沢文庫を訪れた。その際に『看病用心抄』を写真に撮らせていただいたものである。

## 二

### 『看病用心抄（抄）』の写本

安土・浄厳院所蔵写本

## 『看病用心抄』

看病御用心

敬知識看病の人に申上候。往生極楽ハこれ一大事の因縁なり。もし知識の慈悲勧誘のちからにあらすよりは、この一大事を成就する事あらむや。これによりて、病者ハ知識におきて、仏の思ひをなし、知識ハ病者におきて、仏の思ひをなし、知識ハ病者におきて、一子の慈悲たるへし、といへり。しかれハ、すなわち、病者某甲らの所存のおもむきをしろしめて、病にふさんはしめより、命のつきむおはりまで、御用心候へき事ともを、しるし申しをき候。

龍谷大學圖書館所藏寫真

## 『看病用心鈔』

敬テ知識ノ人ニ申上候。往生極楽ハ、是  
一大事ノ因縁也、若、知識ノ慈悲勧誘ノ力  
ニ非ヨリハ、☐☐☐☐☐☐ヲ成就スル事アラシ  
ヤ。コレニヨリテ、☐☐☐☐☐☐ヲイテ仏  
ノ思ヲナスヘシ、知識ハ病者ニ☐☐☐☐☐☐☐☐  
子ノ慈悲ヲタルヘシ、ト云ヘリ。然ハ、則、  
病者某甲ラノ所存ノ趣ヲシロシメシテ、病  
ニフサン始ヨリ、命ツキンヲハリマテ、御  
用心スヘキ事ヲ注申置候。

金沢文庫所蔵写本

## 『看病用心鈔』

## 臨終の用心

善導大師の曰はく、凡世の一大事ハ生死に過たるハなし。一息来らされハ、すなハち後世に属し、一念もしあやまれハ、輪廻に墮すと、人々早く用心すべし。病人は看病人を仏の如く思ひ、又看病人は病人を一人の如く慈悲の念をなすべし。

一、先道場をかさり、本尊をむかへ奉て、  
仏の御手に五色の幡をつけて、病者の手に  
ひかふへき様に、つつらハせ給へ。仏のた  
かさハ、病者のふしなから、よくおかみた  
てまつるほとなり。仏と病者とのあひたは、  
おはりにのそみては、すこしちかからむか、  
よく候ぬへきなり。道場ハ別の所にしつら  
ひ、わたすへし、と申たり。もし、しかる  
へきところなくして、本坊ならば、これ、

一、先道場ヲカサリ、本尊ヲムカヘタテ  
マツリテ、仏ノ御手ニ五色ノハタヲ付テ、  
病者ノ手ニヒカフ□□様ニシツラハセ給へ。  
仏ノタカサハ、病者ノ臥□□ヨクヨクオカ  
ミシテ、マツルホトナリ。仏ト病者□□□  
ノ間ハ、終リニ望テハ、スコシチカカラン  
カヨク候ヌヘキ也。道場ハ別ノ所ニシツラ  
ヒ、ワタスヘシ。若、シカルヘキ所ナクシ  
テ、本坊ナラハ、仏ノ御前ニヨリテ、シツ

一、先道場を莊り、本尊をむかへ奉るへし。仏の高さハ病者の臥なからよく拝ミ奉るほとなり。終に臨てハ、少し近からむかよきなり。道場ハ常の居所よりは別の処にしつらハせ給へし。又、しかるへき所なきならハ、仏の御前によりて、しつらひ臥せ成へきならハ、日頃の居住ハあらたむへし。

ほとけの御まへによりて、しつらひふせて、日比の居所をハ、あらたむへく候。

ラヒオホせて、日比ノ居所ヲハ、アラタムヘク候。

一、目にたち、心をとめぬへき物をハ、病者のあたりに、ゆめゆめこれを、をく事なかれ。香をたき、花をちらして、常に病床をかき給ふへし。又、時香をたきて、時分をはからひて、看病人もかはり、やすませ給ふへし。病ひかるけれハと、おほしめすへからず。人の命のおはる事ハ、刹那のあひたなり。ゆめゆめ御目をはなつましく候。又、やすませ給ハむ時も、病者のあたり遠からず、いきつきか、きこゆる程にやすませ給ふへし。又、日もくれハ、とほしひを、あきらかにともして、ほとけをも、たしかにおかませ。又、病者の気色をも、よく御らんすへく候。病のならひハ、夜ハかならず、をもくなるものなるか故なり。

□□□タチ、心ヲトメヌヘキ物ヲ、病者ノアタリニ、是ヲ置事ナカレ。香ヲタキ、花ヲ□□□テ、常ニ病床ヲカサリ給ヘシ。又、時香ヲ□□□テ、時分ヲハカラヒテ、看病ノ人モ、カハリヤスマセ給ヘシ。病カロケレハト、オホシメスヘカラス。人ノ命ノヲハルコトハ、刹那ノ間ナリ。ユメユメ御目ヲハナツマシク候。又、ヤスマセタマハム時モ、病者ノアタリ遠カラス、イキツキノキコユル程ニヤス給ヘシ。又、日モクレハ、燈ヲアキラカニトモシテ、仏ヲモ、タシカニオカマセ、又、病者ノケシキヲモ、御覽スヘク、病ノナラヒハ、夜ハ必、重ク成力故也。

一、酒肉五辛、このくさく、けからハしき物くひたらん人をハ、病者のあたりに、ゆめゆめよすへからず。もし、これちかつけハ、悪鬼みたれ入て、病人くるひ死にして、三惡道に墮す、と善導いましめ給へり。聖教のおきてのうえ、現証おほくあり。よ

一、酒肉五辛、此臭ク、ケカラハシキ物、クヒタラン人ヲハ、病者ノアタリニ、ユメユメヨスヘカラス。モシ、コレチカハ、悪鬼乱レ入テ、病人クルヒシニシテ、三惡道ニ、ト善導イマシメ給ヘリ。聖教ノヨキテノ現説多クアリ。ヨクヨクコレヲツツシミ

一、目にたち、心をとらむへきものハ、病者の辺に置ことなかれ。焼香散華などして、常に供養し、病の床をも浄むへし。看病の者ハ時分を計て、替替休息すへし。病輕しと思召へからず。人の命の終ことハ、刹那の間なり。目を放ち給ましく候。又、病者の辺遠からず、息継のきこゆるほとこの所、なるへく日の暮たらむにハ、燈を明かにして仏をも、たしかにおかませ、又病者の気色をもよくよく御覽すへく候。病の習ひ、夜ハ必重くなるものなり。

一、酒肉五辛、臭く穢たる物を食したる人は、病者の辺へ、努努寄へからず。若これを近くれハ、悪鬼乱入し、病人狂死して三惡道に墮との給へり。よくよく是を慎むへし。都て病に染む始より、知識看病両三人の外ハ、親きも疎きも人を寄給ましく候。

くよくこれをつつしみ給ふへし。すへて病  
ひつかむはしめより、知識看病の両三人の  
外は、親も疎も、人をよせ給ふましく候。  
いはむや、妻子なむとは、ゆめゆめちかつ  
け給ふましく候。

一、知識三人よきほとと申たり。一人ハ  
枕にあて、鐘をうちて念仏をすすめ、一人  
ハはしにいて、雑事をいひつくへし。人お  
ほくありて、さハかしき事あるへからず。  
たたし、病ひひさしく大事ならは、四五人  
もよし。もし又、知識一人ハかりおハしま  
さハ、常に病者のまなこの気色、いきの出  
て入に、目をはなたすして、鐘をうちて念  
仏をすすめ給ふへし。又、浄土の教をとき  
て、心をすませ給ふへし。念仏の声ハ、高  
からずひきからず、病者のみにきこゆる  
ほとなり。念仏の程ハ、はやからずおそか  
らず、病者のいきに申あはせ給ふへし。こ  
の知識のほか、のこる二人ハ、こころした  
る物ハ、たれにても候へし。不心得の者を  
ハ、ゆめゆめよすへからず。言葉をひそめ  
て、かまひすしく、物さハかしき事を、つ  
つしみ給ふへし。呉々もこの三人の外ハ、  
余人をよせ、悪縁をちかけ給ふへからず

給へシ。スヘテハ病ツカンハシメヨリ、知  
識看病ノ両三人ノ外ハ、親クモ疎クモ、人  
ヲヨセタマフマシク候。況ヤ、妻子ナトハ、  
ユメユメチカツケタマフマシク候。

一、知識三人ヨキ程也。一人ハ枕ニ居テ、  
鐘ヲウチテ念仏ヲススメ、一人ハ病者ノカ  
タハラニ居テ、マヒキ□□ルヘシ。一人ハ  
ハシニ居テ、雑事ヲイヒツクヘシ。人多ク  
有テ、サハカシキ事アルヘカラス。但、病  
久ク大事ナラハ、四五人モヨシ。又、知識  
一人ハカリオハシマサハ、常ニ病者ノ眼ノ  
ケシキ、イキノイテ入ニ、目ヲハナタスシ  
テ、鐘ヲウチテ、念仏ヲススメ給へシ。又、  
浄土ノ教ヲ説テ、心ヲスマサセ給へシ。念  
仏ノ声ハ、タカカラス、ヒキカラス、病者  
ノ耳ニキコルホト也。□□ノ程ハ、ハヤ  
カラスヲソカラス、病者ノイキニ申アハセ  
給へシ。此知識ノ外ハ、ノコル二人ハ、心  
エタルモノハ、タレニテモ候へシ。不得心  
ノモノハ、ユメユメヨスヘカラス。言葉ヲ  
ヒソメテ、カマヒスシク、物サハカシキ事  
ヲ、ヨクヨクツツシミ給へシ。呉々モ、コ  
ノ三四人ノ外ハ、余人ヲヨセ、悪縁ヲチカ

況、妻子なんとハ、其人品にもよることな  
れども、多くハ愛執を引起す端となるへけ  
れハ、用捨あるべし。

一、知識看病ハ三人かよきほととなり。一  
人ハ枕に居て鉦をならして念仏を勧め、一  
人ハ旁に居て病者の眼引に随へし。一人ハ  
端に居て雑事を云次へし。人多く集居て、  
喧嘩あるへからず。但し病久しく大事なら  
ハ、四五人もしかるへし。若また、知識一  
人はかり、ましまさハ常に病者の眼、又ハ  
息の出入に心をとめ、鉦を鳴して念仏し勧  
め給へし。若聞請るほどの気力あらハ、浄  
土の教を説て、信を増させ給へし。念仏の  
聲ハ高からず下からず、病者の耳に聞ゆる  
ほと、緩ならず急ならず。病者の息に唱へ  
合を給へし。若この外に、看病人のほかハ  
意得たる者を、一兩人はかりもあるべし。  
意を得ざる人集り居ハ、何となく喧きもの  
なりまして、悪縁ハゆめゆめ近づくへから  
ず。若訪ひ来る人ありとも、外さまにて品  
よく応答して、病床に近くへからず。病床  
も見苦しく、応対もたへかたきと、病者の

候。おのつから、とふらひきたる人ありとも、外よりあひしらひて、帰して、内へはいれらるへからす。やまひも見くるしく候。病者の申置たるむねなりと候へ。

一、祈祭なんといふ事ハ、さらにかけても、あるへからざる事にて候。療治灸治の事ハ、これ命をのふる事ならず。たた病苦をのそくハかり也。されハ、苦痛をやめて、念仏せしめむためにハ、おのつからもちふへし、といへとも、これもあなかに、尋ねもとむへきにあらす。其故は、およそ生死のきつなにハ、身を愛し、命をおしむをもととし、往生のさハリには、生をむさほり、死をおさるるを、見なもとす。しかるに、療病ハ苦痛のためといふには、にたれとも、いかにも身命をおしむ心ねより、もとめぬへき事にて候。ゆへに、ともかくも、あなかにその沙汰あるへからす候。おおよそ、これらの進退ハ、善導和尚、臨終要決をもて、よくよく御心えあるへく候。又、これをよみきかせて、病者の用心にも、そなへしめ給ふへく候。又、たとひ、やまひかく見え候とも、此やまひにてハ、よもしなし。別の事あらなむといふ事をハ、

ツケ給へカラス候。ヲノツカラ、トフラヒキタル人アリトモ、外ヨリアヒシラハセテ、ウチヘハ、イレラルヘカラス。病モミクルシク候へ。病者ノ申ヲキタル旨ナリト候へ。

一、祈祭ナト云事ハ、更ニカケテモ、アルヘカラサル事ニテ候。療治灸治ノコトハ、コレ命ヲノフル事ナラス。タタ病苦ヲノソクハカリナリ。サレハ、苦痛ヲヤメテ、念仏セシメンタメニハ、ヲノツカラモチフヘシ、トイヘトモ、☐☐コレモアナカチニ、タツ子モトムヘカラス。ソノユヘハ、凡ソ、生死ノキツナハ、身ヲ愛シ、命ヲ惜ムヲモト☐☐シ、往生ノサハリニハ、生ヲムサホリ、死ヲオソルルヲ、源トス。然ニ、療病ハ苦痛ノタメト云ニハ、ニタレトモ、イカニモ身命ヲ惜ム心ヨリ、モトメヌヘキコトニテ候。ユエニ、トモカクモ、アナカチニ其沙汰アルヘカラス候歟ハ。凡ソ、此等ノ進退ハ、善導和尚、臨終☐訣ヲモテ、ヨクヨク御用心エアルヘク候。又、是ヲ☐☐キカセテ、病者ノ用心ニモソナヘシメ給フヘク候。又、タトヒ、病カロクミエ候トモ、コノ病ニテハ、ヨモ死ナシ。別ノ事アラシナト云事ヲハ、知識モオホシメスヘカラス。

申候なんと申候へ。

一、祈念なむと云事ハ、さらに有へからす。療治灸治ハ是定れる命を延ることにあらす。惟病人苦を除くはかりなり。されハ苦痛を止て念仏せんためには、自ら用ゆへしといへとも、是も強に尋求むへきにあらす。其故ハ凡、生死のきつなにハ、身を愛して命を惜むを基とし、往生の障ハ生を貪り死をおさるるを源とす。医療ハ苦痛を除く爲といふには似たれとも、身命を惜む心根より求むへきことにて候なり。故に、強て其沙汰あるへからす候。たとひ病かるく見へ候とも、此病にてよも死なし。別事あらしなると云ことは、知識も思召へからす。また病者にも聞かせ給ましく候。此病を往生の期と悦て、一心に死を待て、来迎を望む心地を勸させ給へく候。

知識もおほしめすへからず。又、病者にも、きかせ給ふましく候。たた、このやまひを、往生の期とよろこひて、一心に死をまちて、来迎をのそむ心地に、すすめなさせ給ふべく候。

一、いかなる重病をうけ、いかなる難所にておわるとも、いとひ玉ひて、妄念となすへからず。又ハ、いつれの所にて、いかやうにて終らんと、おもひしかなむといふ妄念、ゆめゆめあるましく候。それ死ハ、一期のおはり。現報は過因による事なれハ、かねておもひきためたるに、よらぬ事なり。およそ、衆生の業因まちまちにして、死縁一にあらす。あるひハ、つるきにやふられ、矢にあたる。あるひハ、火にやけ、水におほれ、かくのときの横死頓死なりといふとも、まめやかに念仏、功つもあり、運心、年ふかき人ハ、平生の薰習により、臨終正念に住して、念仏往生をとくへし、といへり。況んや、これは重病、苦痛しのひかたし、といふとも、兼て思ひまふけたる死縁なり。何そ、念仏せさらんや。たとひ骨をくたき、髓をくたきといふとも、泥梨多劫の苦をまぬかれん。さためを、何そ最後利

又、病者ニモ、キカセサセ給マシク候。但、此病ヲ往生ノ期ト悦テ、一心ニ死ヲ得テ、来迎ヲ臨ム心地ニススメサセ給ヘク候。

イカナル重病ヲウケ、イカナル難所ニテオハルトイエトモ、是ヲトヒツヒテ、妄念トナスヘカラス。イツレノ所ニテ、何様ニテ、思シカナ、トイフ妄念、ユメユメアルマシク候。夫、死ハ一期ノ終リ。現報ハ果因ニヨル事ナレハ、カ子テ思ヒサタメタルニ、ヨラヌ事也。凡ソ、衆生ノ業因マチマチニシテ、死縁一ニ非ス。或ハ、火ニヤケ、水ニヲホレ、ツルキニヤツレ、矢ニアタル。□□□横死頓死也、トイヘトモ、マメヤカニ念仏、功□□□運心、年フカキ人ハ、平生ノ薰習ニヨリ、仏力ノ護念ニヨリテ、臨終正念ニ住シ、念仏往生ヲトクヘシ、ト云ヘリ。況ヤ、是ハ重病、苦痛シノヒ難シ、トイヘトモ、兼テオモヒマフタル死縁ナリ。何ソ、念仏セサランヤ。タトヒ骨ヲクタキ、髓ヲクタクト云トモ、泥梨多劫ノ苦ミヲ、マヌカレシカ。□□□□最後利那ノ念仏ヲ、ハケマサランヤ。又、正

一、何なる病を受けて何なる難所にて終るとも、忘念となすへからず。又、何れの所にて何様にて終らんとこそ、思ひしかなむと忘念努努有へからず。或ハ現報にあり、或ハ過因によることなれハ、かねて凡情と思ひ定たるには依さること也。凡、衆生の業因まちまちなれハ、死の縁また一にあらす。或ハ劔に破られ、或は火にやけ、水に溺る等の横死頓死なりとも、まめやかに念仏の功積り、運心年久しき人ハ、平常の脩習により、臨終正念に住して、念仏し往生を遂へきなり。況、病床に臥す人ハ、たとひ重病苦痛忍ひかたしといへども、かねて思儲たる死の縁、出離生死の一大事、此時なりと思ひ定めハ、たとひ骨を碎き、髓を抜ほどの苦痛なりとも、泥梨多劫の大苦を思ひくらへハ、何そ最後利那の念仏を励まさらむや。慈悲加祐の護念力に依て、正念往生疑へからず。しかれば、則、此やまひ

那の念仏を、はけまさらんや。又、まさしく寿終のきさみにハ、慈悲加祐の護念力によりて、正念往生疑へからず。しれハ則、この病をもて、往生の勝縁の悦、我等をもて、最後の知識とたのまるへし。無量生死の苦ハ、命のおほりをかきりとし、永劫不退の樂ハ、臺にのるをはしめとす。前念命終の夕にハ、聖衆の来迎にあつまり、後念候。生の朝にハ、弥蛇の授記を蒙ん。ふかく此念に住して、すべてこの世の事をハ、ともかくも露ちり、心におもひとむる事なかれ、とすめ給へし。やまひなのめに、正念たたく候ハむ時より、この理をよくよくいひきかせて、いまハ、たた一すちに、来迎をまつ心地に、すすめなさせ給へく候。

一、病者、食物をねかひとめて、まめやかに、執念をもとめつへきほとに、あなかに、これをいはは、魚なんとにても、くハすへく候か。又、平生の時すら、いましめある事なり。いはむや、臨終病床にのそむてハ、殊更ニ、仏の制止給へる事也、といひこしらへて、こころをとりてのち、その欲心をあらため、なおさるへく候。すてかやうの事ハ、病者の申したさむすら、

ク臨終ノキサミニハ、慈悲加祐ノ護念力ニヨリテ、正念往生疑カラス。則、此病ヲモテ、往生ノ勝縁の悦、我等ヲモテ、最後ノ知識トタノマルヘシ。無量生死ノ苦ハ、命ノ終ヲ限ニシ、永劫不退ノ樂ハ、臺ニ乗ルヲ初トス。前念命終ノ夕ニハ、聖衆ノ来迎ニアツカリ、後念、即、生ノ朝ニハ弥蛇ノ授事ヲ蒙ラン。□□此念ニ住シテ、スヘテ此世ノ事ヲハ、トモカクモ□□モ、心ニ思ヒトトムル事ナカレ、トススメ給ヘシ。病ナノメニ、正念タタシク候ハン時ヨリ、理ヲヨクヨクイヒキカセテ、今ハ、タタースチニ、来迎ヲマツ心地ニススメナさせ給ヘシ。

一、病者、食物ヲ子カヒモトメテ、マメヤカニ、執念ヲトトメツヘキ程ニ、アナカチニ、コレヲイハハ、魚ナントナリトモ、クハスヘク候カ。又、平生ノ時スラ、イマシメ□□事也。況ヤ、臨終病床ニ望テハ、殊更ニ、仏、制シタマヘル事也、ト云ヒ、コシラヘテ、心ヲ取テ後、□□欲心ヲアラタメ、ナホサルヘク候。スヘテ加様ノ事ハ、病者ノ申イテシスラ、猶ハカラヒアルヘク

を以て往生の勝縁と悦ひ思へし。無始以来無量生死の苦ハ、此度命の終りを限とし、永劫不退の樂ハ、台に登るを初とす。前念命終の夕ハ、聖衆の来迎にあつまり、後念即生の朝にハ弥蛇の授記を蒙る。誰の人は是を悦さらむや。此念に住して此世のことハ、兎にも角にも、露塵心に思ひ留ることなかれ、と勸給へし。病なのめに意念もたしかなる時より、此理をよくよく説き聞せ置て、今ひとへに来迎を待候へと、勧めなさせたまふへく候。

一、病者食物を願ひ求て、執念をととむべきほどに、強て是を云ハバ、魚なんとにても、くはすへしとも、平常の時ならバ誠あることなり。況、病床臨終に至ては、ことさらに、仏の制止給へるとこしらへて、心をとりて後、其ほしきを改め直さすへし。すてかやうの事どもハ、病者の云出さむすらなを、はからひあなし。況、病者の思ひよらざる物どもを、何が食したきか、ほ



猶はからひあるへく候。いはむや、おもひもよらぬ者とお、なにかくひたきか、ほしきとせめとふ事、さらに、あるへからざる事なり。そのゆへは、人のいひきたするになれ、いよいよなき物のほしくおほえて、心のみたれ候へきゆへなり。およそ、病者のあたりにて、世間の事をハ、善惡につき、ゆめゆめ物かたり、あるへからず候。かならず、これによりて心のみたるる故なり。よくよくこれを、いましめ給ふへし。たた、いかにしても厭欣をすすめ、称念をはけますへく候。

一、死後の事ハ、兼てしるしおきて候へハ、此様にてあるへく候。又これ、いかにても候ぬへき事也。詮は、最後臨終の念仏往生こそ、大切に候へ。たたし、やまひなのために、正念たしからん時、何事かおもひをくなむといふ事、ひとはし尋とハせ給ふへし。又、病者の申いてんハ、その限きりに候。おはりちかく、みえむ者にむかひて、しきりにかやうの事を、せめとふ事ハ、ゆめゆめあるましく候。その故は、としても、かくしても、此世の事をハ、おもひわすらかして、ひとへに欣求のおもひに

候。況や、思ヒモヨラヌ物トモヲ、何カ、クヒタキカ、ホシキトセヌトフ事、更ニ、アルヘカヲサル事也。其故ハ、人ノ云ヒ沙汰スルニナレハ、ヨシナキ物ノホシク覺テ、心ノミタレ候ヘキ故也。凡ソ、病者ノアタリニテ、世間ノ事ヲハ、善惡ニ付テ、ユメユメ物語アルヘカラス候。必、コレニヨリテ、ミタルルカ故也。ヨクヨク是ヲイマシメ給ヘシ。タタ、イカニシテモ厭欣ヲススメ、称念ヲハケマスヘク候。

一、死後ノ事ハ、兼テシルシ置テ候ヘハ、此様ニテアル□□。又、是イカニテモ候ヌヘキ事也。詮ハ、最後□□ノ念仏往生こそ、大切に候へ。タタシ、病ナノメニ□□□、正念タタシカラントキ、何事カ思置ト云事、一ハシ尋問セ給ヘシ。又、病者ノ申イテンハ、ソノ限候。終チカク、ミエン物ニ向テ、頻ニカヤウノ事ヲ、セメ問事ハ、ユメユメアルマシク候。其故ハ、トシテモ、カクシテモ、此世ノ事ヲハ、思ヒワスラカシテ、偏ニ欣求ノ思ヒニ住シ、来迎ヲノソム心ニ、住セシメンカ為ナリ。

しきかと責問こと、さらさら有へからざることなり。其故ハ、人の沙汰ともになれハ、よしなきもののほしくおほえて、心のみだれ候へき故なり。凡、病者のほとりにて世間の事をハ、善惡につきて物語あるへからず候。それにより心のかるる故なり。よくよく是を、誠め給へし。唯いかにもして、厭欣をすすめ、称念を励すへきなり。

一、死後の心にかかるへきことハ、かねて記しておくべし。所詮ハ、最後臨終こそ大事に候へ。旁よりも、病のために氣力たしかなるとき、何事か申置などいふこと、尋ね問せ給へし。病者の申おさむハ其限に候。終ちかく、見へんものにむかひて、後の事など責問ことあるべからず候。たた此世のことをバ、忘しめて欣求の思ひに、住せしめむため也。

住し、来迎をのそむ心に、住せしめんかためなり。

一、あひかまへて、病者をくるしめ給ハされ。大小便利も、おきてしつへくとも、くるしくハ、たた臥しなからせよ、と候へ。いはんや、かなはぬを、しゐておこし、ふせなむとする事ハ、返々、心えぬ事にて候。たた、むつきをあつくして、しかせて、つねに、これをとるかへとりかへして、くさくけからハしき事を、のそくへし。又、はなかず、つはきなんともあらは、あひかまへて、これをはらひのそきて、つねに病床をきよむへく候なり。

一、屏風障子ていの物を、かまへて、大小便利の不浄のときハ、仏前のへたとと、せさせ給へ。これも、やまひきふになり、臨終ちかく見えは、このしつらいまでも、かへり見す、仏と病者とのあひをへたてずして、これをおかまさせ給へ。又、常に紙を水にそめて、喉をうるへて、念仏をすすめ給へく候。

一、およそ某ハ、もとより、はらもあし

一、相構テ、病者ヲクルシメ給ハサレ。大小便利モ、オキテスヘクトモ、クルシクハ、タタ臥サカラセヨト候ヘ。況ヤ、カナハヌヲ、シ井テオコシ、フセナトスル事ハ、返々、心エヌ事ニテ候。タタ、ムツキヲアツクシテ、シカセテ、ツ子ニ、コレヲトリカヘトリカヘシテ、クサク、ケカラハシキ事ヲ、除クヘシ。又、ハナカス、ワキナトモアラハ、相構テ、コレヲハラヒノソキテ、常ニ、病床ヲキヨムヘキナリ。

一、屏風障子等ノ物ヲ、カマエテ、大小便ノ不浄ノ時ハ、仏前ノヘタテトセサセ給ヘ。コレモ、病、急ニナリ、臨終チカクミエハ、コノシツラヒマテモ、サハカシク候ヘシ。タタ不治ヲモ、カヘリミス、仏ト病者トノ、アヒヲヘタテスシテ、是ヲオカマセ給ヘ。又、常ニ、紙ヲ□□□□、ノトヲウルヘテ、念仏勸メ給ヘク候。

□□□某ハ、モトヨリ腹モアシク、心モ

一、相かまへて、病者の苦を思やりて、大小便利も起てしつへくとも、苦しくハ臥なからせよと申候へ。況、かなハぬを強て起、臥させなむどすることハ、返々こころへぬことにて候。惟、むつきを厚くしかせて、常に是をとるかへて、臭く穢ハしきことを除へし。又、鼻かず、つはきなんどもあらバ、是を掃除して、常に病床をきよむへきなり。

一、屏風障子などをかまえて、大小便利の不浄のときハ、仏と病者の間を、かりにへたつへし。若、病重くあらハ、此しつらひまでも及ハす候。また、病者の間をへたてずして、常に仏を拝ませたまへ。又、常に紙なむとを水にひたして、喉を潤はし念仏をすすめよ。

一、病者知識にむかひて思云へし。某ハ

く、心もくせて、わろきあせ物にてと、まして、病をうけ候ぬる者のくせとして、はらもあしく、心えぬさまにみえ候なり。それをハ、大慈悲をおこして、こしらへさせ給へ。病者におきて、ねんころに、思ふ心さしをしらせ、善惡につきて、まひきに、したかふよしをミせ給へ。これすなわち、心をとりに、すすめに、かなハしめ候ためなり。又、おほせ候へ、我心なほし、我心にかなはぬ事にて候へハ、おのおのいよいよ、ねんころに、おもひたてまつれとも、なおも、こころにかなはぬ事ハ、さためて候へし。これハ穢土のならひそと、おほしめして、ゆめゆめうらみ給ふ事なかれ。もし、機にかくれハ、正念をうしなふもとなり。かるかゆへに、よくよくこれを、つつしみ給ふへし。およそ人をうらみ、人をいかる事ハ、生涯のあひた、なおし是をいましむへし。いかにいはむや、最後臨終におよびて、はかなき事によりて、妄念をおこして、又、生死にかへらん事、返々も、おろかなるへし。すてハ、とにもかくにも、穢土をいとひ、浄土をねがふ心を、いよいよすすめ給ひて、仏のちかひをたのみ、名号を唱へ給ふへし。されハ、たた詮してハ、

クセシテ、ワロキ身ニテ候。マシテ、病ヲウエ候ヌルモノクセトシテ、ハラモアシク、心エヌサマニ、ミエ候也。ソレヲハ、大慈悲ヲオコシテ、コシラヘさせ給へ。病者ニ於テ、子シコロニ思フ志ヲ知セ、善惡ニツケテ、マヒキニ、シタカフヨシヲミセ給へ。コレ、スナハチ、心ヲ□□トリテ、勸ニカナハシメンカ為ナリ。又、仰せ候へ、□□ナヲシ、□心ニ叶ハヌ事ニテ候へハ、各ハ、ヨク子シコロニ、思タテマツレトモ、尚モ、心ニカナハヌ事ハ、定テ候ヘシ。是ハ穢土ノナラヒソト、オホシメシテ、ユメユメ心ヲシタリ給ヘカラス。機縁ハ、コレ正念ヲ失フ基也。故ニ、ヨクヨク是ヲ、ツツシミ給ヘシ。凡ソ、人ヲウラミ、人ヲイカル事ハ、生涯ノ間、□□シ、是ヲイマシムヘシ。イカニ況ヤ、最後臨終ニオイタテ、ハカナキ事ニヨリテ、妄念ヲ起テ、又、生死ニ返ラン事、返々モ、ヨロカナルヘシ。スヘテハ、トニモカクニモ、タタ穢土ヲ厭ヒ、浄土ヲ子カフ心ヲ、イヨイヨススメ給テ、仏ノ御誓ヲタノミ、名号ヲ唱ヘ給ヘシ。サレハ、タタ詮シテハ、トクシテ、コノ穢土ノ境ヒ、苦惱ノ身ヲステテ、早く無為常樂ノ浄土ニ、生レント思テ、一心ニ、命ヲ

もとより、腹あしくして心もくせして、あしきあせものにて候。まして病をうけぬる者のくせとして、腹あしく心得せる様に見え申へきなり。其をハ、知識の大慈悲を以て、こしらへさせ給へ。知識も又病者にむかいて、慇懃に思ふところを知らせ、善惡に付て、真引したかふ由を見せ給へ。さて、心をとりに、勸に叶しめむためなり。知識等病者にむかいていふへし。己が心なを、己が心に叶ハぬことに候へハ、我々ハ、よくよく懇に思ひ奉れども、尚、意に叶ハさることハ、定て候ひぬべし。是をハ、穢土のならいと思召て、努努恨ミ給べからず。若、機にかかれハ、正念を失ふ基なり。よくよく是を慎ミたまふべし。凡、人を恨ミ人ヲ謾ことハ、平生の間、猶是を慎む。況、最後臨終に及て、はかなきことによりて、妄念を起し、生死に還らむこと、返々愚かなるべし。たた兎にも角にも、穢土をいとひ、浄土をねがふ心をはげまし給へし。所詮ハ、はやく穢土の境の苦惱の身をすてて、無為安樂の浄土に、生れなんと思て、一心に來迎をまちたまへと、すすめさせ給へし。

とくしてこの穢土のさかひ、苦悩の身をす  
てて、はやく無為常樂の浄土に、むまれな  
んとおもひて、一心に、命をすてん事をの  
そみ、ひとへに來迎を、まち給へしと、こ  
の心地に、すすめなさせ給へく候。

一、病者、夢にもうつつにも、みる事あ  
らは、知識にこれをかたるへし。病者、お  
もひはれて申さすハ、知識、何事か見ゆる  
と、つねにとはせ給へし。もし、罪の相な  
らは、知識こころをいたして、おなしく懺  
悔し、念仏して罪を滅すへし。善の相なら  
は、いよいよすすめはけまさせ候給へし。  
およそ善惡の二事、知識も、又ゆめゆめこ  
れを、人に知らせ給へからず。

一、聞法にハ、常に臨終講式と、往生要  
集の十樂とを、よみてきかせ給へく候。十  
樂の中にも、ことに第二段を、つねによま  
せ給へ。又、和尚云、およそ人、臨命終の  
時、浄土に往生する事を、えむとおもハハ、  
すへからく、先、つつしんで死をおそれ、  
生をむさほる事をえされ。常に、ミつから  
おほしめすへし。我、現在の身ハ、おほく  
衆苦あり。不浄惡業、種々に交纏す。もし、

ステン事ヲノソミ、ヒトヘニ來迎ヲマチ給  
へシ。此心地ニ、ススメナさせ給へ。

一、病者、夢ニモ、ウツツニモ、ミル事  
アラハ、知識ニ是ヲ語へシ。病者、思ヒホ  
レテ申サスハ、知識、何事カミユルト、ト  
ハセ給へシ。罪ノ相ナラハ、知識、心ヲイ  
タシテ、同ク懺悔シ、念仏シテ罪ヲ滅スヘ  
シ。善ノ相ナラハ、彌、勸テ励ませ給へシ。  
凡ソ善惡ノ二事、知識ノ外ニハ、是ヲユメ  
ユメシラセサレ。知識モ又、ユメユメ是ヲ、  
外ノ人ニシラセ給へカラス。

一、聞法ニハ、常ニ臨終講私記ト、往生  
要集ノ十樂トヲ、読テ聞かせ給へシ。十樂  
ノ中ニモ、第二段ヲ、常ニヨマセ給へシ。  
又、和尚云、凡ソ、人、臨命終ノ時、浄土  
ニ往生スル事ヲ、エントオモハハ、須、先、  
慎テ死ヲオソレ、生ヲ食スルカヲ、エサレ。  
常ニ、自、自念スヘシ。我モ、現在ノ身ハ、  
オホク衆苦アリ。不浄惡業、種々に交纏ス。  
モシ、此穢身ヲ捨テ、即チ、浄土ニ往生ス

一、病者、夢にもうつつにも、見る事  
あらハ、知識に是をかたるへし。病者、若  
思にほれて申さすハ、知識のかたより何事  
を見ると、常に病者に問へ。若、罪縁な  
らハ、知識、もともに心を至して懺悔し、  
念仏して罪を滅すへし。善相ならハ、いよ  
いよ歡励すへし。凡、善惡の二事ともに知  
識も慎ミ、他に語るへからず。

一、聞法ニハ、常ニ臨終講私記ト、往生  
要集ノ十樂トヲ、読テキかせ給へシ。十樂  
ノ中ニモ第二段ヲ、常ニヨマセ給へシ。又、  
和尚云、凡ソ人、臨命終ノ時、浄土ニ往生  
スル事ヲエントオモハハ、須、之慎テ、死  
ヲオソレ生ヲ貧スル事ヲエサレ。常ニ自、  
思念スヘシ。我レ現在ノ身ハ、オホク衆苦  
アリ。不浄惡業、種々に交纏ス。モシ、此  
穢身ヲ捨テ、即チ、浄土ニ往生スル事ヲエ

この穢身をすて、すなはち、浄土に往生する事をえつれハ、無量の快楽を受、見仏聞法、離苦解脱せむ。すなはち、これ称念の事也。臭弊の衣をぬきて、珍御の服をきる事を、えむかことし。心身を放下して、恋着を生ずる事なかれ。わづかに病患あらは、輕重を論ずる事なく、すなはち、無常を念じて、一心に死をまつへし。専ら阿弥陀仏をねんして、心口相應し、声にたゆる事なかれ。決定花臺、聖衆來て、迎接し給ふ、想をなすへし。己上略抄。此文を常によみて、きかせ給へく候。又、念仏をしつかに申て、來迎の讃を頌して、きかせ給ふへく候。又云、衆生称念 即除多劫罪、命欲終時仏与聖衆自來迎接、乃至、一切善惡凡夫得生者、乃至、彼仏今現在世成、乃至、光明遍照十法世界、乃至、此等の文を、頌して念仏をすすめ給へく候。

一、説法のおもむきハ、さきにあらあら申候。又、すへて厭離穢土、欣求浄土の理、

ル事ヲエツレハ、無量ノ快楽ヲウケ、見仏聞法、離苦解脱セン。則、是称念ノ事ナリ。臭弊ノ衣ヲヌキテ、珍御ノ服ヲキル事ヲ、エンカ如シ。身心放下シテ、恋着ヲ生スルコトナカレ。ワツカニ病患アラハ、輕重ヲ論セス。則チ、無常ヲ念シテ、一心ニ死ヲマツヘシ。モハラ、阿弥陀仏ヲ念シテ、心口相應シ、声ニ断ル事ナカレ。決定シテ、花臺ノ聖衆來テ、迎接シ給フ想ヲナスヘシ。己上略抄。此文ヲ常ニ読テ、キカセ給ヘク候。又、念仏ヲシツカニ申テ、來迎ノ讃ヲ頌シテ、キカセ給ヘク候。又云、衆生称念、即除多劫罪、命欲終時仏与聖衆自來迎接、諸邪業繫無能碍者故名増上縁也、己上、一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿弥陀仏大願業力為増上縁也、己上、彼仏今現在世成仏当知本誓重願不慮衆生称念必得往生、己上、光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨、己上、此等ノ文ヲ、頌シテ念仏ヲススメ給ヘク候。

一、説法ノ趣ハ、先ニ、アラアラ申候。又、スヘテ厭離穢土、欣求浄土ノコトハリ、

ツレハ、無量ノ快楽ヲウケ、見仏聞法、離苦解脱セン。則、是称念ノ事ナリ。臭弊ノ衣ヲヌキテ、珍御ノ服ヲキル事ヲ、エンカ如シ。身心放下シテ、戀着ヲ生スルコトナカレ。ワツカニ病患アラハ、輕重ヲ論セス。則チ、一無常ヲ念シテ、一心ニ死ヲマツヘシ。モハラ阿弥陀仏ヲ念シテ、心ニ相應シ、聲々断ル事ナカレ。決定シテ、花台ノ聖衆來テ、迎接シ給フ想ヲナスヘシ。己上略抄

此文ヲ、常ニ読テキカセ給ヘク候。又、念仏ヲシツカニ申テ、來迎ノ讃ヲ頌シテ、キカセ給ヘク候。又云、衆生称念即除多劫罪命欲終時仏與聖衆自來迎接諸邪業繫無能碍者故名増上縁也。己上  
一切善惡凡夫往生者莫不皆乘阿弥陀仏大願業力為増上縁也。己上  
彼仏今現在世成仏当知本誓重願不慮衆生称念必得往生。己上  
光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨。  
己上 此等ノ文ヲ頌シテ、念仏ヲススメ給ヘク候。

一、説法ノ趣ハ、先ニアラアラ申候。又、スヘテ厭離穢土、欣求浄土ノコトハリ、本

本願の引接、此時にあるべく候。抑、無窮の生死をすて、不退の浄土にいたらん事、すてに、この時にのそめり。ゆめゆめ本望を失する事なかれ。返々、用心怠るへからず。夫レ、一期の念仏は、臨終の来迎を期し、本願の引接ハ、寿終の時をまつ。現其人前者不取正覚といへり。本誓重願、尤もふかし。終焉の来迎疑フ事なかれ。まことに、平生多年の勤修なおし、これをおこたらず。臨終少時の念仏、何そ、これをはけまさらんや。たとひ、百苦きたりせむとも、一心をみたる事なかれ。三尊の来迎、此時にミたり。九品蓮臺さためて、疑なし。故に、相構々々正念みたれす。口称おこたらずして、命のつくるをまち、聖衆の迎へを期すへしと、云々。このおもむきを、勧給へく候。

一、病者某甲か、年来の臨終用心の様ハ、ふかく現其人前の御ちかひをたのむ、慈悲加祐の御たすけをあおくに候。しかれハ、すなはち、日来の功によりて、臨終にハ、仏来迎し給へし。仏の来迎を見たてまつり、護念力を蒙によりて、正念に住して念仏して、往生の素懷をとくへし、と心えて候な

本願ノ引接、コノ時ニアルヘキヨシ。イクタヒモ、タタ此事ニアルベク候。抑、無窮ノ生死ヲステテ、不退ノ浄土ニイタランコト、既ニ、此時ニノソメリ。ユメユメ本望ヲ失井ル事ナカレ。返々、用心、ヲコタルヘカラス。夫、一期ノ念仏ハ、臨終ノ来迎ヲ期シ、本願ノ引接ハ、寿終ノ時ヲマツ。現其人前者不取正覚、又、本誓重願、尤フカシ。終焉ノ来迎、疑事ナカレ。実ニ、平生多年ノ勤修直、是ヲヲコタラス。臨終少時ノ念仏、何ソ是ヲハケマサランヤ。タトヒ、百苦キタリセムトモ、一心ヲミタル事ナカレ。三尊ノ来迎、此時ヲ得タリ。九品蓮臺定テ、疑ナシ。故ニ、相構々々正念乱ス。口称、ヲコタラスシテ、命ノツクルヲマチ、聖衆ノ迎ヲ期スヘシ。云々。此趣ヲススメ給ヘク候。

一、病者、某甲カ、年来ノ臨終用心ノ様ハ、深く現其人前ノ御誓ヲタノム。慈悲加祐ノ御タスケヲ仰ニ候。然ハ、則、日来ノ功ニヨテ、臨終ニ念約スレハ、仏来迎シ給ヘシ。仏ノ来迎ヲ見タテマツリ、護念力ヲ蒙ニヨリ、正念ニ住シテ、往生ノ素懷ヲ遂ヘシ、ト心得テ候也。然、間、平生ノ時ヨ

領ノ引接、コノ時ニアルヘキヨシ。イクタモ、モノノ此事ニアルヘク候。抑、無窮ノ生死ヲステテ、不退ノ浄土ニイタランコト、既ニ此事ニノソメリ。ユメユメ本望ヲ失スル事ナカレ。返々、用心ヲコタルヘカラス。夫、一期ノ念仏ハ、臨終ノ来迎ヲ期シ、本願ノ引接ハ、寿終ノ時ヲマツ。現其人、前者不取正覚、又本誓重願尤フカシ。終焉ノ来迎、疑事ナカレ。実ニ平生多年ノ勤修、尚是ヲヲコタラス。臨終少時ノ念仏、何ソ是ヲハケマサランヤ。タトヒ百苦キタリセムトモ、一心ヲミタル事ナカレ。三尊ノ来迎、此時ヲ得タリ。九品華台定テ疑ナシ。故ニ、相構々々心念乱レス。口称ヲコタラスシテ、命ノツクルヲマチ、聖衆ノ迎ヲ期スヘシ。云々。此趣ヲススメ給ヘク候。

一、病者 某甲カ年来ノ御タスケヲ、仰ニ候。然、則、日来ノ功ニヨテ、臨終ニ念仏スレハ、仏、来迎シ給ヘシ。仏ノ来現ヲ見タテマツリ、護念力ヲ蒙ニヨリ、正念ニ安住シテ、往生ノ素懷ヲ遂ヘシト、心得テ候也。然、間、平生ノ時ヨリ、最後ノ念ニ至ルマテ、タタ仏助ケ給ヘト、思フ此存念

り。しかるあひた、平生の時より、最後の念にいたるまで、たたはとけたすけ給へと、おもふこの存念なり。されハ、常にこの念をかまへて、わするな、とおほせ候へし。およそ、我等凡夫の往生をとけん事、弥陀の大願業力にあらずハ、多生眩劫にも、のそ見たてたる事なり。されハ、仏ハふかく、ちかひをおこして、引接をたれ。我等ハ、ふかくちかひをたの見て、来迎をまつ。此故に、ねてもさめても、たたすけ給へ、阿弥陀仏とおもひて、称念をはけむへし。是を最要として、すすめさせ給へ。もしハ又、失念のために、つねに念仏を申きかせ、いかになと、おとろかし、すすめ給ふべく候。

一、もしハ業障により、苦痛にも責られて、物くるハしくなり、気色もあしさまに、みえ候ハハ、弥陀身色如金山云々、観音頂戴冠中住云々、門々不同八万四云々、この文、三ツをつねとなへて、念仏を高く申給ふへし。中にも、門々不同の文ハ、よく頌しきかせて、高声念仏を、みみにあて、きき入るほとに申させ給ふへし。もし又、苦痛きハまりて、失念にもおよひ、称念も

り、最後ノ念ニ至ルマテ、タタ仏、助ケ給ヘト、思フ此存念ナリ。サレハ、ツ子ニ此念ヲ構テ、ワスルナ、ト仰候ヘシ。凡ソ、我等凡夫ノ往生ヲ、トケンコト、弥陀ノ大願業力ニアラスハ、多生眩劫ニモ、望タエタル事也。サレハ、仏ハフカク誓ヲ教シテ、引接ヲタレ。我等ハ、深ク誓ヲ憑テ、来迎ヲ待ツ。此故ニ、子テモサメテモ、タタスケサセ給ヘ、阿弥陀仏ト思テ、称念ヲハケムヘシ。コレヲ最要トシテ、ススメサセ給ヘ。若ハ、又、失念ノ為ニ、ツ子ニ念仏ヲ申キカセテ、イカニナト、オトロカシ、ススメ給ヘク候。

一、若ハ、業障ニヨリ、苦痛ニモ、セメラレテ、モノクルハシクナリ、ケシキモアシサマニ、ミエ候ハハ、弥陀身色如金山云々、観音頂戴冠中住云々、門々不同八万四云々、此文、三ヲ常ニ唱テ、念仏ヲタカク申給ヘシ。中ニモ、文々不同ノ文ハ、ヨク頌シキカセテ、高声念仏ヲ、耳ニアテテ、キキ入ル程ニ申させ給ヘシ。若、又、苦痛キハマリテ、失念ニモ及ヒ、称念モ叶ス候トモ、

ナリ。サレハ、ツ子ニ此念ヲ称テ、ワスルナト仰候ヘシ。凡ソ、我等凡夫ノ往生ヲトケンコト、弥陀ノ大願業力ニアラスハ、多生曠劫ニモ望タエタル事也。サレハ仏ハフカク、誓ヲ発シテ引接ヲタレ。我等ハ深ク誓ヲ憑テ、来迎ヲ待ツ。此故ニ、子テモサメテモ、タタ、タスケサセ給ヘ、阿弥陀仏ト思テ、称念ヲハケムヘシ。コレヲ最要トシテ、ススメサセ給ヘ。若ハ、又失念ノ為ニ、ツ子ニ念仏ヲ申キカセテ、イカニナト、オトロカシススメ給ヘク候。

一、若、業障により、苦痛に犯され気色あしく見へバ、念仏を耳にあて、聞入ほととなふへし。若、苦痛きハまりて、失念し、称にもおよハぬほとならハ、念仏を高くとなへ聞すへし。唯、往生の正業臨終の勝縁念仏に如へからず。

かなはず候とも、たた耳に念仏、たかく申きかせ給ふへく候。およそ、としてもかくしても、往生の正業、臨終の勝縁、念仏にしくへからす候。

一、苦痛顛倒して、物にくるひ、失念無記にも成て、ちからおよはされハとて、いまハかなハし、と思食て、すてはつる事ハ、ゆめゆめあるましく候。まことに、五逆罪の者の、はしめて知識にあへる。なお、十念のちからによりて、まさしく往生をとく。いかにいはむや、これハさすかに、としころハ、おもひならハせる往生なり。申つけたる念仏なり。夢のことくにも、本心おのつから、いてきなハ、かならず廻向念仏すへく候。知識の念仏のきハまり、病者の用心のきハめ、たたこの時に候へし。かやうならんにつきても、いよいよ慈悲をもて、救護し給ふへし。いかに汝、すてに最後としらすや、と候ひて、かまへて念仏をすすめ、もしハ、申てもきかせせ、おハしませ。もし一人往生をとけハ、御利益、広大なるへし。年来の御本望、最後の御恩、たたこの時に候へし。

タタ耳ニ念仏、高く申キカセ給ヘク候。凡ソ、トシテモカクシテモ、往生ノ正業、臨終ノ勝縁、念仏ニ、シクヘカラス候。

一、苦痛顛倒シテ、物ニクルヒ、失念無記ニモナリテ、力及ハサレハトテ、今ハカナハシ、ナト思食テ、ステハツル事、ユメユメアルマシク候。実ニモ、五逆罪ノ者ハ、始テ知識ニアヘル。ナヲ、十念ノ力ニ依テ、正ク往生ヲトク。何ニ況ヤ、コレハサスカニ、年来ハ、思ヒナラハセル往生也。申ツケタル念仏也。夢ノ如ニモ、本心、ヨノツカライテコハ、必、廻向念仏スヘク候。知識ノ慈悲ノキハマリ、病者ノ用心ノキハメ、タタ此時ニ候ヘシ。加様ニ候ハンニ付テモ、彌、慈悲ヲモテ、救護シ給ヘシ。イカニ汝、已ニ最後トシラスヤ、ト候テ、カマヘテカマヘテ念仏ヲススメ、若ハ、申テモキカセオハシマセ。若、一人往生ヲトケハ、御利益、広大ナルヘシ。年来ノ本望、最後ノ御恩、タタコノ時ニ候ヘシ。

一、苦痛顛倒して、物に狂ひ失念無記になるとも、今はちから及ハすと、捨給ふことと努努あるへからず。五逆罪の者たにも、臨終に始めて、善知識に遇て、十念の力に依て正しく往生を遂く。また、是ハさすかに、年来思ひ習ハせる往生なり。となへ馴れ聞なれたる念仏なれば、夢のことくにも、本習おのづから出来し、念仏すべきなり。知識看病の本期、病者用心の極なり。たた此時、かくのことくならむに付ても、いよいよ慈悲をもつて救護すべし。



一、おほかた、人のまことの最後、断息のきさみを見おはる事ハ、きハめて大事にて候。用心ゆるくしてハ、ふつと、かなふましく候。その故ハ、やまひのならひとして、よくなるやうにて、死ぬる事候。又、おはりニハ、苦痛もなくなりて、しぬる事も候。又、いきつきの、はやくなりておはるも候。又、次第にゆるく成て、おはるも候。かくのことく、やうやうしなしな候へハ、詮ハ、目をはなたぬにハ、しくへからず候。就中に、善趣の生をうけ、往生をも、とくへき人に、なり候ぬれハ、おはりハいよいよ見聞もあきらかに、正念もたしかになり候なり。又、終りちかくなりたる人の、物をよくいう事候。又、いまハよも死なし、と病者の申候。かやうな事、ともにはかされて、まことのおはりを、みぬ事おほく候。これすなはち、生死をすつるおはり、菩提にいたるはしめ、この一刹那に候。まことに、一息きたらされハ、すなはち後世に属す。一念もしあやまちぬれハ、輪廻に墮す、といへり。かなしきかな、いかにせむ。ねかハくハ、知識、大慈大悲をもて、憐愍救護して、弟子か最後断寿のきさミ、一息ととまるあひたを、見おくらせ

一、大方、人ノマコトノ最後ノ断息ノ、キサミヲ見ヲハル事ハ、極テ大事ニテ候。用心ユルクシテハ、フツト、カナフマシク候。其故ハ、病ノ習トシテ、ヨクナル様ニテ、死ヌル事候。又、終リニハ、苦痛モナクナリテ、死ヌル事モ候。又、イキノ早ク成テ終ル候。又、次第ニユルク成テ、ヨハル候。カクノ如ク、ヤウヤウシナシナ候へハ、タタ詮ハ、目ヲハナタヌニハ、シクヘカラス候。就中ニ、善趣ノ生ヲモウケ、往生ヲトクヘキ人ニ、ナリ候ヌレハ、ヲハリハ、イヨイヨ見聞モ明ニ、正念モ、タシカニナリ候ナリ。又、終リチカクナリタル人ノ、物ヲ、ヨク云事多ク候。又、今ハ、ヨモシナシ、ト病者ノ申シ候。加様ノ事、トモニ、ハカサレテ、マコトノヲハリヲ、ミヌ事多ク候。是、則、生死ヲスツルヲハリ、菩提ニイタルハシメ、又、此一刹那ニ候。マコトニ、一息ツカサレハ、則チ後世ニ属ス。一念、モシアヤマチヌレハ、輪廻ニ墮ス、ト云リ。悲哉、イカンセン。願ハ、知識、大慈悲ヲ以テ、憐愍救護シテ、弟子カ最後断寿ノキサミ、一息トマル間ヲ、見ヲクラセ給ヘ。長ク歴却ノ受苦ヲ、マヌカレテ、速ニ無為常樂ニアツカラン。

一、凡、知識となりて最後断息の時を見おくること、極たる大事なり。用心ゆるくしてハ、ふつに叶ふまじきなり。某故ハ、病者のならひ、快なるやうにて死すること候。苦痛なくなりて、死することも候。又、次第に緩成て終事も候。就中、善趣の生を受へき人ハ、終も弥正しく、見聞もあきらかにて正念なるもの也。又、終り近く成たる人のものを、能いふて、よも死なしなど云ことあり。かやうの事に怠て、誠の終りを見ぬ事多し。実に、生死を離る終り、菩提に至る始、この一刹那にありされハ、後世に属す。一念もしあやまりぬれハ、輪廻に墮といへり。願くハ、知識となるの人、大慈悲の心をよくよく用ひたまふへし。

給へ。なかなか歴劫の受苦を、まぬかれて、すみやかに無為常樂にあつからん。

一、まさしくおはらん時ハ、たとひ、いつかたへむかひ、いかやうにありといふとも、これをおしむけ、きひきむけ、病者にさはりゆるかす事ハ、ゆめゆめあるましく候。最後の時ハ、いささかの事も、しつらひとなりて、心念みたれ候へきゆへなり。たし、みみにききいれよと、念仏たかく申させ給へ。たとひわれと、口称にあたはずとも、高声に縁せられて、意念ハたかふましきか故なり。又、いきたえ、事きれぬれハとて、物さハかしき事、ゆめゆめあるましく候。たた猶々も、心をすまし、念仏を申させ給ひて、一、二時の程も、すこさせ給へ。又、この功をもて、中有よりも、往生をとけよと、心いたして廻向し、ましますべく候。以前、将々ハ、病のはしめより、かねて、よくよくこのむねを、御心えあるべく候。その御用心のために、あらあら記シ申候。これを大概として、その外の事ハ、ときにのそみ、おりにしたかひて、よきやうに御はからひ候へく候。かやうの事とも、おほしめし、さためのちハ、いま

一、正ク終ラン時ハ、タトヒ、イツカタへ向ヒ、何様ニアリト云フトモ、是ヲ、ヲシムケ、引ムケ、病者ニサハリ、ユルカス事ハ、ユメユメアルマシク候。最後ノ時ハ、聊ノ事モ、シツラヒト成テ、心念ミタレ候ヌヘキ也。但、耳ニキキイレヨト、念仏タカク申させ給へ。タトヒ、ワレト口称ニアタハヌトモ、ソノ声ハ縁セラレテ、意念ハタカフマシキカ故也。又、息タエ、事キレヌレハトテ、モノサハカシキ事、ユメユメアルマシク候。タタ尚々モ、心ヲスマシテ、念仏ヲ申させ給テ、一二時ノ程モ、スコサセ給へ。又、コノ功ヲモテ、中有ヨリモ、往生ヲトケヨト、心ヲイタシテ、廻向シマシ、マスヘク候。以前、常々ハ、病ノハシメヨリシテ、カ子テヨクヨク此旨ヲ、御心エアルヘク候。ソノ御用心ノ為ニ、アラアラシルシ申候。コレヲ大概トシテ、ソノ事ハ、時ニノソミ、オリニシタカヒテ、ヨキヤウニ、御ハカラヒ候ヘク候。カヤウノ事トモ、オホシメシ、定テ後ハ、今ハ一向臨終念仏ノ、一事ニナリカヘリ候テ、万事ヲ

一、正しく終る時ハ、病者のかたち、たとひ何方へ向て、いかやうにあるとも、是を押向引むけて、動かすことゆめゆめあるへからず。最後はいささかのことも、煩ひとなりて、心念みたるゆへなり。但、耳に聞入ほどに、念仏をほとよく唱ふべし。たとひ病者、自、口称にあたはずとも、聲に縁せられて、意念にあれハなり。又、息絶へての後も、ものさハかしきこと、あるへからず。なをなを心を澄して称名し、若ハ一二時、若ハ一日一夜も、そのままにてすごすへし。念仏の功德を以て往生を遂しめ給へと、至心に回向しおはるへし。これらを大概として、其外のことハ、時の宜にしたかひ給へきなり。外のことは時にのそむて、かハるとも、仏たすけ給へ、とくむかへ給へといふ、意地をはしめより終まで、肝要として勧め給べし。わけて最後には、詞多からず、要をとりて、ねかハくハ、仏われをむかへ給へと思ひて、念仏せよ、とすすめたまふへきなり。予、年来臨終の用意の様ハ、現其人前の誓願をたのミ、慈悲

は一向臨終念仏の、一事になりかへり候て、一すちに、厭欣をすすめ、称念をはけまして、寿終の時をまち、来迎を期さしめ給へ。所詮、余事ハ時にのそみて、いささかの、かはるといふとも、仏たすけ給へ、とくむかへ給へといふ。この念を、はしめより、おはりまで、肝要としてすすめ、おはしますべく候。就中に、最後にハ、ことはおほからず、要をとりて、願くハ、ほとけ、とくむかへ給へと思ひて、念仏せよと、すすめおはしますべく候。あなかしこあなかしこ。

シ、□□諸想ヲヤメテ、タタースチニ、厭欣ヲススめ、称念ヲハケマシテ、寿終ノ時ヲマチ、来迎ヲ期セシメ給へ。所詮、余事ハ時ニ望テ、聊、カハルト云トモ、仏、助ケ給へ、トク迎へ給ヘト云。此念ヲ、ハシメヨリ、終リマテ、肝要トシテススめ、オハシマスヘク候。就中ニ、最後ニハ、言、多カラス。要ヲ取テ、子カハクハ、仏、トク迎へ給ヘト思テ、念仏せヨト、ススメオハシマスヘク候。穴賢穴賢。

加祐の護念を仰くなり。しかれハ、日ころの功によりて、臨終には仏、定て来迎し給へし。仏の来迎をおかミたてまつり、護念力を蒙むるによりて、正念に住して往生の素懷を、とくへしと、こころうるなり。平生より最後の念に至まで、唯仏たすけたまへと思、はかりなり。凡、愚縛の凡夫往生を遂ることハ、彌陀の大願業力にあらされハ、多生億劫にも望を絶たることなり。されハ、仏ハふかく誓を起して、引接をたれ、我等ハ、ひとへに誓をたのみて来迎をまつ。此故に、ねてもさめても、唯たすけ給へ、阿彌陀仏と称名、はけむへきなり。用意のためにあらあら記しおかんぬ。

一、有人の云、病人念仏をわすれたる時、人来て勧ハ、有かたく思ひて唱べし。又、わすれざる時、すすめられバ、いよいよあやかたく思へし。我ハ、わすれすして唱るものをと思へハ、やかて憍慢になるに依てなり。わすれたるにすすめ給ことは、仏の加念にあつかりなりと思ひ、信心をいたして、称名すべし。又、看病の人、病者をあつかふとて、退屈のころ出来ることも、はやく往生し給へかし。なむど努努あるべ

南無婦命頂礼大慈大悲最後善知識臨終哀  
慇懃進往生。

南無婦命頂礼大慈大悲阿弥陀如来不捨本  
弘誓願臨終来迎引接極樂上求下化大願圓滿。

此用心書案悟真寺上人作也云々。

文保三年正月九日書写早。執筆阿忍、  
六十七

曆応二年八月六日、以安樂寺御本、於  
靈山院書写早。

南無阿弥陀仏：：：平等利益

康永二年六月二日、於横河靈山院如月  
坊之草庵書写早。執筆覚阿、卅

貞和二年季秋下旬之比書写早。案阿在  
判、

以上本藏ノ分也

于時応永廿癸己季暮秋上旬之比、於江  
州金勝寺東之谷草庵、為末代利益書写  
之訖、後見南無阿弥陀仏十遍

南無婦命頂礼大慈大悲最後善知識臨終哀  
慇懃進往生。

南無婦命頂礼大慈大悲阿弥陀如来不捨本  
弘誓願臨終来迎引接極樂上求下化大願圓滿。

看病用心鈔

私云然阿弥陀仏良忠也

鎌倉上人御作

貞治二年癸卯九月廿六日□寫筆老眼

□□□不□行之間□教日吉也。写本□

□文和二年二月九日□教大僧都於

□□院所□写之本也

幸門（花押）七十四歳

からず。一大事の時なれば、いつまでも臨  
終正念を期し、病者をなぐさめ給ふべし。  
はやく往生あれがしと思へば、殺生の業を、  
むすふかゆへなり。此趣も知べきことなり。

予曾テ京都市西本願寺派法鼓台本ヲ閱覽  
セシトキ、存覚ノ直筆ニシテ鎌倉上人作ト  
記スル右ト同名ノ本ヲ見タリ、爾来、茲  
二六年鎌倉上人ハ記主上人ニ非ザルカト心  
ツキ諸方ニ尋ネ居リシニ、計ラズ講義中ニ  
右ノ趣ヲ話セシニ、広瀬念成君ハ自坊ニア  
ル事ヲ告ケラル、依ツテ之ヲ借覽シ写得セ  
シモノナリ。

原本大崎桐ヶ谷専修寺所藏

（徳川写本）

昭和貳年十二月十四日

石井教道記

昭和二十八年六月十四日大正大学図書館  
藏本ニヨリテ写ス。伝ヘキクニ、専修寺藏  
本ハ今次戦災ニ消滅セリトイフ。

金沢文庫ニテ 熊原政男誌

右筆天台沙門 隆堯

此臨終行儀 并十樂令感得之  
永為常□物之也

淨嚴院十四世

元禄十六未五月 日 貞與(花押)

## おわりに

鎌倉の大本山光明寺の開祖であり、浄土宗第三祖といわれる然阿良忠上人（一一九九―一二八七）は、一二四〇年頃に、この『看病用心鈔』を著わしたと伝えられている。わが国最古の看護書であるが、その内容は、浄土宗の僧が死に臨む者に当っての看取りの心得を説いた臨終書と思われる。各条目の内容、良忠作との伝、三種の写本について、更には、この『看病用心鈔』の現代的意義などについては次回に詳述したいと思っている。

なお、この三種の写本の調査に当っては、多くの関係者の方々のご好意によって調査研究することができ感謝している。また、この研究に関する出張費などは、すべて高崎直道先生を代表者とする平成八・九年度の科学研究費によったものであることを記しておく。また、今小路覚真氏のご好意により常楽台所蔵の『看病用心鈔』を写真に納めることができた。この資料については次回に詳述したい。